

デジタル化による写真史料学研究の方法論的再構築

—「上田貞治郎日本全国名所写真帖」コレクションのデータベース化を通じて—

後藤 真^{1・2}

緒川直人^{2・3}

1 花園大学 文学部文化遺産学科 2 大阪市立大学都市研究プラザ特別研究員

3 日本学術振興会特別研究員

Email: m-goto@hanazono.ac.jp midorigaoka-gakujin@star.email.ne.jp

概要

本稿は、「上田貞治郎日本全国名所写真帖」コレクションのデータベース化を通じ、写真史料学のためのデータベース手法のあり方を提案するものである。上田貞治郎(1860-1944)は、20世紀前半期屈指の写真材料商であり、(古)写真コレクターであった。彼は蒐集した写真群をアルバム20巻に編修した。本データベースは、このアルバム20巻を、史料学的視点からデジタル化したものである。フォンドーアルバム群—アルバム—ページ—写真プリントという構造のもとにデータベース化を行うことにより、写真史料を構造的に理解する仕組みを作成した。またメタデータの検討によって、映像の比較・照合の仕組みを検討した。データベースによって、写真の流通や、アルバムの理解の方法、そして、史料群全体の理解の方法など写真史料学の寄与への可能性を検討する。

Digital archiving for the reconstruction of methodology of Photograph archives

Makoto GOTO^{1・2}

Naoto OGAWA^{2・3}

1 HANAZONO University 2 Osaka City University Urban Research Plaza

3 Research fellowship of JSPS

In this paper, the research of “Ueda Teijiro Nihon Zenkoku Meisho Shasin-cho”(Ueda Teijiro the photograph Album the sights of JAPAN) Database. Ueda Teijiro (1860-1944) was photographic supplies dealer, also was a collector. He edited the photograph group which he collected in 20 albums. This database digitized these 20 albums from the visual angle of the historical materials studies. We made the structure(Fonds - Album groups - Album - Pages) which understood photograph historical materials structurally by compiling it into a database with structure called the photograph print. In addition, by the examination of meta data, We examined structure of comparison / the collation of the picture. By this database, the circulation of the photograph and a method of the understanding of the album and a method of the understanding of the whole historical materials group examine possibility to the contribution of photograph historical materials studies.

1. はじめに

本稿は、「上田貞治郎日本全国名所写真帖」コレクション(以下、「上田コレクション」と略す)のデジタル化の事例について報告するものである。上田貞治郎写真コレクションの史料構造に準拠してデジタル化を実現することで、史料研究や史料を引証する史料研究、はたまた史料の保存と活用を行うための、効果的なシステムの提案を行う。上記コレクションの写真史料学的研究の最新成果を踏まえつつ、本データベースによって、写真史料学及び史料学一般の参照系たるべきデジタル化の可能態について、新たな提案を行うものである[1]。

2. 「上田コレクション」とその特徴

本研究で対象とする史料は、戦前日本を表す写真材料商上田写真機店の店主上田貞治郎(1860-1944)が蒐集した約1800点にお

よぶ景観写真群を集成したアルバム群、いわゆる「上田貞治郎日本全国名所写真帖」コレクション(アルバム20巻で伝存)である。

上田コレクションの一部は、昭和59年(1985)3月、読売新聞大阪本社社会部編『おおさかタイムトンネル浪速写真館』として刊行された[2]。だが、当時の主要な関心は写真の被写体(何が写っているのか)に収斂しており、写真史料としての情報は、概して旧蔵者上田貞治郎のキャプションから景観地情報を得たに留まる。写真群の伝来経緯や「群」としての出処と類別、撮影年代範囲、撮影者や販売者の考証、アルバム史料としての形態学的特徴など、史料学的考証や日本写真史学の成果に再定位する作業は未着手であった。近年状況改善が認識されつつあるとはいえ、こうした傾向は依然大勢をしめており、史料学としては未熟な段階にある。

日本写真史学、歴史学、人文科学資料のデジタル化に関わる史料研究の現状を以下に示しておきたい。これらは学知間の没交渉が祟り、本質的に交わることは少なかった。

まずは、日本写真史についてである。2005年、日本写真史家吉田成は、写真史料学研究の見取図を描いた試論的な論稿「古写真の調査・鑑定の方法」において、「写真史料学や写真鑑定学といった分野は、未だ確立されていないのが現状です」と述べている〔3〕。

日本写真史学は写真史家小林美香らが指摘するように、芸術学やマス・コミュニケーション論を背景に存立してきた事情から、「表現の歴史としての写真史」を中心に「作家列伝」「写真技術」「報道写真」等の定型ジャンルを編制してきた〔4〕。斯学は歴史学（日本近現代史）や史料学と棲み分け状態にあったことは否めず、写真を殊更「写真史料」として再定義し、史料学的検証を試みる関心は甚だ稀薄であった。

他方、史料学的作法に晩熟であった日本近現代史でも、史料学の時代を迎えた1973年、津田秀夫「近代公文書学成立の前提条件」論文〔5〕が公文書に附随する写真や航空写真を史料概念に包摂する提言をしている。さりながら以後の近代史料論における写真のあつかいは、古文書学講座『今日の古文書学12巻 史料保存と文書館』（2000年）巻頭論文の松尾正人「総説」でも依然提言の水準に留まり、具体的な専論は用意されることがなかった。

搔痒感を覚えざるをえないかかる事態は、日本史学の通弊として定着した感もある。事実、日本近代史家松尾尊允「近現代史料論」論文（1995年）は、国会図書館憲政資料室の私文書史料を含む「近代政治史史料の保存と利用の歴史」を手際良く整理したが〔6〕、「龍野周一郎関係文書」「中江兆民関係文書」「河野広中関係文書」「星亨関係文書」に含まれるアンプロタイプ、オリジナル・アルバム、鶏卵紙の肖像写真群など、良質な写真史料群を考察対象にしていない。

また現状では、鈴江英一や中野目徹の一連の研究に象徴されるように、本格的な近代史料学研究の関心は公文書等の文字史料に向けられているのが実情である〔7〕。

3. 写真のデジタル化の研究史と課題

一方、人文科学とコンピュータの世界においては、歴史資料を積極的にデジタル化しようという試みは続けられてきている。特に、写真は、図像の比較・照合などについてデジタル化が有益である。所謂「古写真」に限ってみると、長崎大学附属図書館は約6000点の古写真を「幕末・明治期日本古写真メタデータ・データベース」としてデジタル化してい

る〔8〕。また、東京大学学際情報学府の馬場章研究室における上野彦馬「歴史写真」に関する一連の試みがある〔9〕。前者は、デジタル化の目的自体は、あくまでも史料の公開という機関哲学に従ったものであり、個別の写真を提示するにとどまり、写真のさまざまな文脈や、撮影時の情報などが積極的に提示されるにはいたっていない。後者は、多様なメタデータを付す試みを行っている点で注目される。しかし、上野彦馬関係文書等の関連史料群の不在という史料状況、上野彦馬撮影写真という利用史料の性質もあるものの、簡潔な「作家列伝的」データベースにとどまり、今後の発展を期待する段階である。

また、国学院大学研究開発推進機構日本文化研究所が、写真史料の研究活用手法について確認と提案を行った〔10〕。この「手引き」は基礎的な手法を網羅し、「保存・整理・と活用は表裏一体である」と提言したように、資料保存に着目した点は重要である。

また、資料構造ごとに適切な目録を作成すべきであるという主張も、既存の史料学・アーカイブズ学の要求にも適い、なるほど道理である。しかしながら、それらの成果が、デジタルのインターフェースや、データ構造にまであらわれない、もしくは、留意されるべきであるという点は見逃されているのである。

さらに、メタデータを効果的に用いた横断検索の必要性を主張しながらも、標準メタデータの存在に触れておらず、中途半端の感が否めない。

ところで、大阪市立大学大学院文学研究科都市文化研究センターは、21世紀COEプログラム「都市文化創造のための人文科学的研究」の一環として、先の上田アルバムのうち10巻（写真1000点余）を「デジタル・アーカイブス」に構築した。同プロジェクトでは、データベース上でアルバム単位まで表現することは実現した。しかし、データ表現としては写真単体の表現に留まること、白黒写真であるという理由でグレースケールによる画像のデジタル化を行ったこと、メタデータの設定が不明瞭で、かつ誤謬も散見されることなど、「上田コレクション」の史料学的な分析を行うための仕組みをデジタルのうで実現するにはいたらなかった〔11〕。

こうしてみると、写真史料の比較・照合にデータベースが必需の装置であることは衆目の一致するところであり、データベースの整備が写真史料の史的検証に有益であるにも関わらず、その要請を満たす段階には至っていないことがみてとれる。

そこで筆者らは、大阪市立大学都市研究プラザの事業の一環として、「上田コレクション」データベースの本格的作成に着手した。

4. 作成したデータベースでの特徴

デジタル化に際し、まずは写真史料群の史料学的検証の成果（緒川論文参照）を踏まえる必要がある。その結果、写真史料の扱いには以下の特徴を考慮する必要性を認識した。

1. 写真史料は、それ自体が複製可能であり、社会的に流通する媒体であるため、伝来経緯を知る必要がある。
2. 写真はそれのみではなく「アルバム」を生成する。アルバム分析が重要な位置を占める。
3. 写真史料は視覚史料の情報であり、その情報を分析するためには、常に再現・比較可能な分析手法の構築が必要である。
4. 写真史料は映像内容（イメージ）のみでは、歴史学など諸学の素材として十全な使用に耐えがたい。いつどこで、誰が撮影し、誰が販売したのか、印画紙や台紙の材質や種類や印刷情報、現像手法など複雑なメタデータを案出することは、検証に不可欠の工程である。これらの諸課題を解決することが、古写真を史料学的に取り扱うための突破口の一端となる。

その解決のためのデータベースを筆者らは作成している。現在はプロトタイプ段階だが、その手法をもって「写真史料学のためのデータベース」の基礎的な視角を提案したい。

基礎的なシステムは、iPalletnexusを採用する。iPalletnexusは、「大きな画像を閲覧しながら画像の中の内容を書きとめ比較する研究支援ツール」として、作成されている。現在は、主要なシステムの部分がオープンソースとなっている。今回は、このシステムに拡張を加え、写真史料学の構築に特化するシステムにデザインすることを目指している〔12〕。

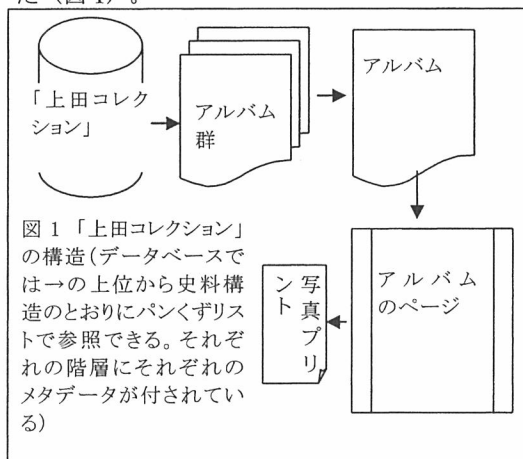
以下、アルバム分析・メタデータ・比較照合について、さしあたり実現したものを説明していきたい（予定のものも含む）。

4-1. アルバム分析一ページと生成一

写真を多角的に分析するためには、製作者の主観が投影されるアルバムの表現は、きわめて重要な問題である。多くの写真データベースでは、写真プリントの「イメージ（被写体）」と「材質」に着目することが多く、それ以上の情報を組込むことは稀であった。アルバムに編成されたプリントであれ、コレクション史料群であれ事情は同様である。いづれにせよ、写真は個別の興味に従ってデータ化されがちであり、群としてのまとまりを失っている場合が多い。結果、アルバムのページや、プリントの配置などは事実上デジタルデータからは読み取れなくなっている。

無論、原資料が単体の写真の分散的な集積の場合もある。さりとて、アルバム史料群についても、それら同様の扱いが望ましいと考えるとしたら早合点である。緒川（2008）を踏まえれば、むしろアルバムページに生成しているミクロ-コスモスを効果的に表現してこそ、デジタル上でも写真を史料学的に分析できる枠組が整うといえる。

そこで、本データベースでは、まず、史料構造をデジタルで把握できるような仕組みを作成した。アーカイブズ学の研究成果を参照し、「上田コレクション」が、彼の蒐集したコレクション群であることに着目し、一連の蒐集史料群をフォンドとして定義した。以下、アルバム群、アルバム、写真プリント・説明文（アイテム）という順序で、かつ、史料の順序を維持したまま、表示させる工夫を行った（図1）。



まず、アルバム群全体の状態を示し、そこから、必要なデータにアクセスする仕組みを作成した。個別のアルバムや写真を閲覧する際には、左部にエクスプローラ状の階層構造を表現し、データの構造の一覧性を高めることとした。

アルバムは原本調査によって、大阪市立大学製作の旧データベースの配列順序と、当時の順序が異なることも判明している。そのため、現在の順序と、貞治郎が想定した順序を変更しつつ表示させる仕組みを作成した。

その根拠は、貞治郎が想定したアルバム配列順序が、何らかの意図をもった可能性があったことも推定できるからである。史料提供者という我々の立場性に鑑み、史料の存在可能性を遺漏なく表現することを重視したからである。

アルバムの構造を示すことが、史料の生成過程を分析するための一助となりうる可能性も考慮した。本ツールでは、最終的には、写真史研究者によって、情報を付加することに

より、写真の情報のみならず、上田貞治郎の史料群全体の知識の集積を狙う〔13〕。

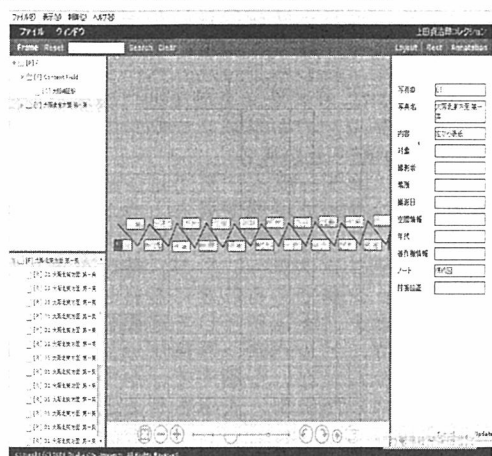


図2 アルバムの構成図(折本状のアルバムのページ位置を表現している。左は史料構造をフォルダ単位で表示。また、アルバム単位でメタデータを付記することも可能としている(右部)。)

さらに、「上田コレクション」を構成するアルバム史料群の最大の特徴は、貞治郎が蒐集した景観古写真群とともに、貞治郎が生きた1920年代末期前後の同一場所・地点の「現在の景観」を撮影した景観写真群を、両者比較可能なデザインで同一ページにレイアウトしているアルバム群が存在する点である。このアルバム編制法（アルバムワーク）は「今昔比較対位法」と緒川が命名し、現在検討が進められている。

少し仔細に見ていきたい。図3（次ページ）は、貞治郎が作成したアルバムの一ページである。このアルバムの中心を占めるのは、貞治郎が蒐集した明治期撮影の古写真（複製：ゼラチンシルベープリント）である。その周囲に、貞治郎が意識的に撮影した昭和初期の同一場所・地点の景観写真がレイアウトされているのである（例示写真は大阪難波駅頭の景観）。

一点一点の個別写真のデータでは、見えてこない多くの情報がここには含まれている。上田貞治郎が、たとえば「古写真」を中心に大きく据えることによる「インパクト」付けの意識である。「現在」の写真を周囲にレイアウトし、周到にも景観変化をめぐるキャプションを傍書することで、景観の人文地理的変遷について、歴史地理的な意識付けを行っている。

これは、貞治郎が写真とアルバムの巧みな編集法を駆使することで、「何か」を語らせるアルバムデザインを目指したことにほかならない。緒川（2008）によれば、貞治郎はア

アルバムレイアウトの創意工夫を通じて、都市大阪の明治期と昭和初期の同一場所・地点をめぐる一種の定点観測的な都市地理的変遷、すなわち都市史叙述（ピクチャーストーリー）を実践しているのである。アルバムのレイアウト自体が、貞治郎の歴史意識を表現しているのである。

したがって、この写真のレイアウトと、大きさのバランスをデータで表現することが、写真史料学のデータベースとしては、きわめて重要になる。また、このアルバムページ自体にメタデータを付し、情報を流通・共有させることが、史料理解にとってきわめて重要であるといえる。本システムでは、アルバムを表現することによって、はじめて彼の「歴史叙述と歴史意識」をデジタルで表現することとなる。我々は「今昔比較対位法」による歴史叙述をデジタルで表現したのである。

また、写真の「切り合い関係」なども、アルバム単位での分析によってはじめてわかる。

これにより、貼付された写真の上下関係が明確となる。さらに、アルバムを見開きで表現することによって、貞治郎が写真に捺した印（「上田文庫」という朱印が一部写真に捺印されている）の状況が確認できることもある。たとえば、左ページに捺した印が、右ページに移っていることがある。これは、写真をアルバムに貼付した後に印が捺された可能性を示唆している。状況次第で「写真の貼り換え」などの、アルバム内部の整序工程（アルバム成立過程）が判明する可能性もありうる。

4-2 アルバム分析—メタデータと流通経路—

古写真に関わるデータベースでは、前述のとおり被写体情報のみならず、多様なメタデータが必要である。

基本的な、画像情報のメタデータに関しては、すでに世界レベルでの厚い蓄積がある。

ブリストル大学附置研究所のサイトでは、画像のデジタル化について、教育レベルでの情報提供を行っており、そのなかでは、いくつかのメタデータについての手法や特徴などが述べられている [14]。

本データベースでは、最終的に採用する標準メタデータについては、現在、同研究所のサイトを参考として、検討を進めているところである。現時点では、自由度の高さと、その特性から、暫定的にはダブリンコアの、基礎要素の採用を中心にすえ、探っている。しかし、METS (Metadata Encoding & Transmission Standard) [15] の可能性など、

さまざまな可能性も含め、メタデータの採用は今後の課題であるといえる。史料構造との関連や、日本の史料特性、日本の史料学と

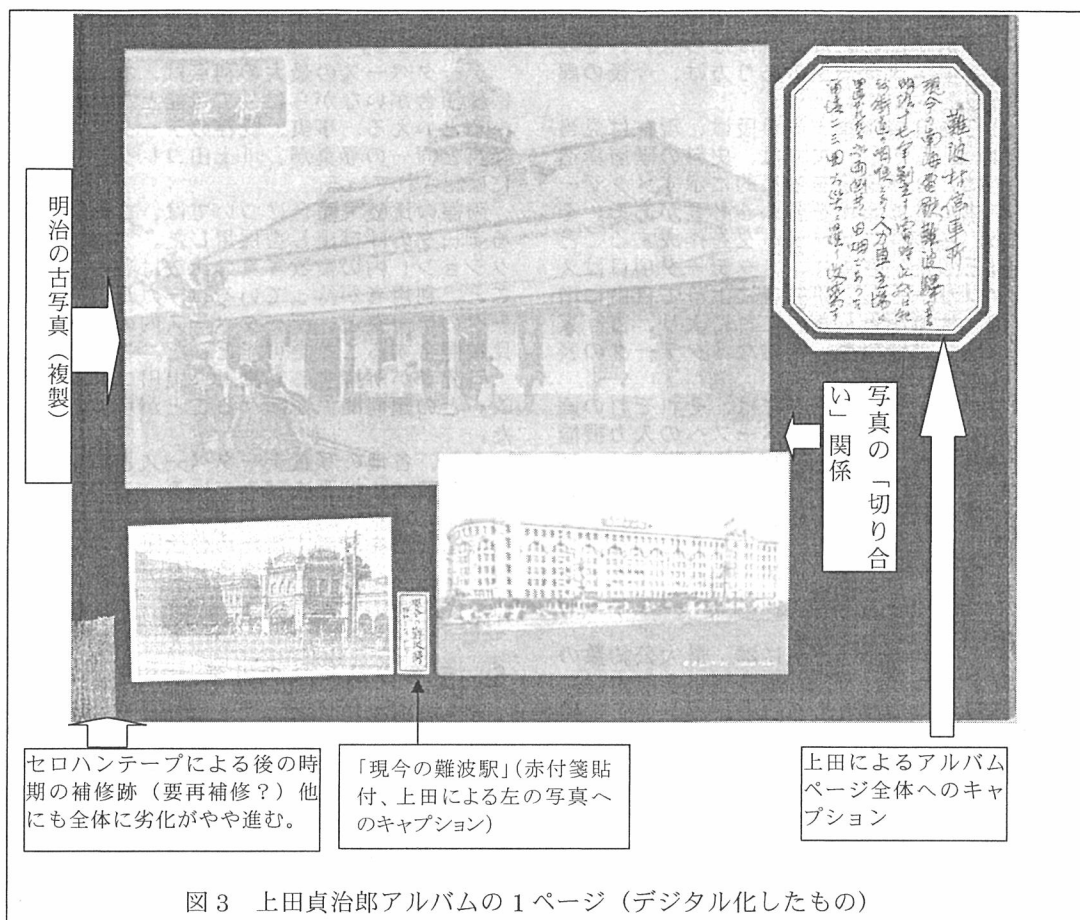


図3 上田貞治郎アルバムの1ページ (デジタル化したもの)

の連関性などを含めて、総合的に検討されなければならない。

写真そのものについては、まず最低限の情報はメタデータとして設定可能であろう。デジタル化に際しての各位相ごとのデータ化についても、上記サイトなどを参考にすれば、ほぼ問題のない形式でのメタデータ作成が可能である。撮影・現像・そして複写のそれぞれに関して、主体（撮影者・現像者など）・日時・場所などが、考えうるメタデータとなる。無論、被写体は何であるかも問われなければならない。

ただし、写真は「複写」されることがあることを考慮に入れなければならない。そのこと自体は、メタデータに影響を与えない。しかし、複写したものが、流通経路にのることと、ある種の「コレクション」であることも重視されなければならない。どこから入手したのか、その経路はどのようなものであったのか、複眼的に考えるためのメタデータを考慮しなければならないだろう。既存のメタデ

ータとのかかわりを念のため、考慮しておく必要があるといえる。

むしろ、問題はアルバム・アルバム群にある。

物質としてのアルバムであれば、アルバムの作成年・作成者・アルバムの所持者・形態などが主たる情報になるであろう。コンテンツとしてのアルバムページであれば、掲載されている写真・レイアウト・ページの生成時期・印章の有無なども重要である。場合によっては「白紙」すらメタデータとしては重要な情報となりうる。アルバム全体の中で「白紙」が占める割合が、アルバム全体の完成度を問うことになる可能性もありうる。

これ以外に、アルバムの流通経路、材質、生成手法なども考える。

たとえば、上田貞治郎コレクションの中には、我々が「野々村藤助アルバム」と呼称しているアルバムがある。これは、貞治郎の実兄野々村藤助が所持していたアルバムを、貞治郎が譲渡されたものであることが判明したため〔16〕、そのように命名されたものであ

る。この場合は、写真の流通ではなく、アルバム流通が問われなければならない。その状況を示すメタデータのあり方は、今後の課題であるといえよう。

これらを直接解決する手段は、現在は見当たらない。しかし、まずは、史料の階層構造とともに、全体構造を効果的に示すメタデータを作成できる環境を整える必要がある。そのため、各階層にメタデータを作成することを可能とした。さらに、メタデータ項目はスキーマフリーとし、研究者によって自由に増減可能な仕組みとした。これにより、古写真の伝来経緯の情報や、複雑なメタデータの表記を可能とした。

アルバム・アルバム群には、それぞれの画像表示の段階で、データベースへの入力機能を可能とした。また、写真そのものへは、アルバムのページから ipalletnexus のアノテーション機能を用いることによってメタデータを付すことを可能にしている。さらに、写真の内部へのメタデータの付加・付箋やキャプションも、個別にメタデータを付すことを可能とした。

メタデータの記述方法には、最大公約数のみを記す方法と、可能な限り項目を設定しておく方法と二つが考えられる。本システムはまず写真の史料学的分析のためのメタデータを作成し、「写真史料学」の確立のためのツールであることを目指している。そのため、写真を「史料として」分析するためのメタデータを設定することを目指した。

これは、他の地域や、他の分野の画像データベースとの連関を否定したものではない。本節の最初で述べたように、標準メタデータの採用により、海外も含めた他地域の写真史料との接合を将来的には積極的に目指している。その接合の実現可能性として「外部データとの比較・照合システム」を検討中である。

さらに、我々としては「写真史料学としてのメタデータの可能態」を提言する予定である。

4-3 画像の比較と照合

写真史料は複製され、流通する。その流通経路こそが、写真の伝来や、写真を所持した人々のネットワークなどを理解するのに非常に重要になる。そのためには、流通経路の情報と同時に、空間的に遠隔地にある写真を照合する「工夫」が必要となる。そのためには、まずは、デジタル化を行い、他地域にある写真を比較・照合する仕組みを作成することが、もっとも有益であり、効率的であるといえる。比較・照合のためには、単に高精細の画像があればいいわけではない。効果的なメタデータ（印画紙の質・撮影者などの判明しうる限

りの情報）や、写真の多様な画像分析の手法が重要となる。

データベースの最大の利点は、本来煩雑な画像照合がいながらにして可能となることであるといえる。事実、既存のデータベースの写真と同一の写真が、「上田コレクション」に確認されている。

画像の比較・照合については、二画面によるデータの呼び出しを採用した。「上田コレクション」内の複数写真の比較はもちろんのこと、利用者が持っているローカルコンピュータのデータと、データベース内の写真とを比較照合することを可能とした。これにより、

研究者が所持する写真と「上田コレクション」との類同関係を調べることが可能となった。

また、各地の写真データベースとの結合・知識蓄積への拡張を試みている。このことによって、日本全国に散在するさまざまな写真の流通経路を解明するための仕組みの提案を行う。このためには、標準メタデータの整備が欠かせないであろう。

5. データベースの拡張

本研究の素材である「上田コレクション」はほぼ景観写真に純化しており、地図上や、コンピュータの空間上に位置を表現するのに好都合な史料であるといえる。その景観は、京阪神を中心に沖縄以外の日本列島から朝鮮半島まで、帝国日本の国土をほぼ網羅している。そのため、景観地の仔細さえ判明すれば、地図上でデータを見ることが可能となる。現時点では、ipalletnexus の中に地図を取り込み、表現することから検討を開始している。都市空間において史料の位置づけを表現することが可能となる。

将来的には、映像情報だけではなく、地理情報もメタデータとして付すことにより、GISなどと連携を図れば、それぞれの写真が、現在のどの位置なのかなど、より立体的に史料を理解することも可能となろう。それにより、ある写真が映し出した景観の近隣の空間上にいかなる他の「人文科学の資料」や、「人文科学研究の成果」があるかを GIS によって知ることが可能となる。このことによって、人文科学研究の学際化のひとつの結節点（key）を提示することが可能となる。これは、写真史料が近代史研究において用いられる際の有力な方法論の一つとなるであろう。

景観写真であるため、今現在の写真を加えることによって、古写真の時代と、1920 年代、

そして現在という三層の「今昔比較対位法」を表現することも可能とした。

6. 本データベースの特徴

本データベースは、デジタル化を行うことによって、写真史科学の進展に資することができる一事例となるであろう。写真の流通経路解明のための類同関係の照合、史料構造の表現、メタデータの付与、地理情報など、さまざまな課題を同時にこなすことのできるデータベースは、写真史科学の進展にとっても非常に大きな役割をしめることがわかる。今後、他データベースとの連携や、写真情報の相互交換の仕組みなど、より拡張性の高いシステムを構築することが必要である。

また、研究成果の還元を研究者のみならず、「市民の生きた過去」をうまく表現することによって市民に向かって行うためにも、写真データベースは有効であるといえる。

市民が自らの来し方を見つめ直し、歴史意識を涵養するインキュベーターとしても、近年写真史料は多用される傾向にある。過去の情報を視覚的に把握でき、記憶を想起するための「契機」となりやすいためである。現在は、

資料館や自治体史などの多くの場で「いま・むかし」というテーマに則して写真史料が用いられる。また、多くの「古写真」の写真集が出版される傾向もある。

そのため、多くの写真史料を、自分たちの生きている場に則して閲覧することができるデータベースは、研究成果の公開を行うためにも有効なツールである。単にノスタルジアを揺さぶる主情的なツールとしてだけでなしに、

むしろ景観変遷に刻印された社会変動などを理解できる、効果的なメタデータの設定が望まれる。

また、アーカイブズ学的に有益なデータベースとしても効果が大きい。アーカイブズ学に基づくデータベースは、無論多くある。アジア歴史資料センターをはじめ、国内の多くのデータベースがある。そして、EAD という、世界標準のメタデータのものと、統合的にデータの共有が始まっていることは、つとに知られている。

本データベースのもっとも特異な点は、構造を維持しつつも、データの並び替えを GUI 的に行えたこと、そして、構造を「超えた」データの参照を、比較的わかりやすい形で可能としつつあることである。これは、複数の史料を同時に検討の遡上におきたいという、研究者のニーズに沿ったものである。現在の多くのアーカイブズのデータベースは、単一の史料情報と、史料情報の提供者による関連情報しか同時に閲覧することができない。

これは、デジタルデータ上で、人文学史料のトライ・アンド・エラーを反復しつつ、検討を進めるためには、不向きな側面がある。本

データベースは、アルバムの並べ替え、史料構造の明確な表示という狙いから、画像データを GUI 的に自由に移動できる仕組みを備えている。この機能を、研究者に開放することによって、さまざまな試験的な並び替えを可能とした。

7. まとめ

本研究は、個別の手法や技術自体に革新性があるとは必ずしも言えない側面があることは否定できない。しかし、その技術の融合・重層の結果、出される成果は、既存の学問体系では解けない・既存の複合領域ですら解決できないものである点が、革新性の本義といえよう。

もとよりそれは、「ニッチ」な研究ではない。本来は、重要な課題であったはずの写真史料が、既存の学問の枠組みと縄張り意識のため読み解く手法を持ち得なかった。しかしデータベースの作成により、諸学の知識の融合と協力を促し、新たに写真史料が読み解けるようになる点が、本研究のもっとも革新的な点といえるであろう。

以上のように、「上田コレクション」は、写真史科学を検討するのに、まさに好例であるといえる。明治初期から昭和戦前期にいたるまで、さまざまな写真がアルバムに収蔵されている点、これらの一部が都市大阪の今昔という視角の下に編制されている点など、写真史料としても多面的な形態を保持したまま伝存しており、これらをデータベース化することで写真史料学構築を期した基礎的なデザインを獲得することが可能となるであろう。

本データベースの構築により、写真史料を多角的に見、また、史料として分析するための可能性を、世界中に発信できる、一つの可能性を提示している。今までとは異なる、新たな方向性を導き出すことができるだろう。

また、本研究は人文科学の統合を目指すことにより情報学を用いた人文科学研究の発展への寄与の事例としても貴重なものとなるであろう。

註

[1] 本稿で言及する、蒐集家論、今昔比較対位法、アルバム史料論など、「上田コレクション」をめぐる写真史科学の主な論点は、緒川直人の研究（緒川『蒐集から都市の写真史へー上田貞治郎写真コレクションの写真史科学』広島大学大学院総合科学研究科提出修士学位论文、2008 年 3 月、緒川「古写真蒐集家と『写真史-以前』未発表原稿、2008 年 11 月」による。

[2] 読売新聞本社社会部編『大阪タイムトンネル 浪速写真館』朋興社、1985 年

- [3] 吉田成「古写真の調査・鑑定の方法」、
<http://blog.latened-image.com/?eid=60801>、2005 年
5 月
- [4] 小林美香『写真をく読む』視点』青弓社、2005 年、
11 頁
- [5] 『歴史学研究』403 号、1973 年 12 月
- [6] 松尾尊兌「近現代史料論」朝尾直弘他編『岩波講座
日本通史 別巻 3 史料論』岩波書店、1995 年。
- [7] 中野目徹『近代史料学の射程 明治太政官文書研
究序説』(弘文堂、2000 年)
- 鈴江英一『近現代史料の管理と史料認識』(北海道大
学出版会、2002 年)
- [8] 幕末・明治期日本古写真メタデータ・データベース
<http://oldphoto.lb.nagasaki-u.ac.jp/univj/> (2008 年
9 月 8 日)
- [9] 倉持基、研谷紀夫、津田光弘、馬場 章「デジタルア
ーカイブを利用した歴史写真の情報学的研究」(『人文
科学とコンピュータシンポジウム論文集』2006、2006
年)
- [10] 国学院大学研究開発推進機構日本文化研究所
『写真資料デジタル化の手引きー保存と研究活用のため
に一』(2008 年)
- [11] 後藤真「上田貞治郎写真コレクションー都市文化
とデジタル・アーカイブー」(大阪市立大学 21 世紀
COE プログラム「都市文化創造のための人文科学的研
究」研究成果報告書『アーカイブスの新指向』、2007
年)
- [12] <http://www.ipalletnexus.org/>
- [13] 写真のみの研究者による情報の集積については、
馬場章研究室の一連の成果がある。
- [14] ブリストル大学附置研究所によるデジタル化の通
信教育サイト(<http://www.tasi.ac.uk/>)
- [15] <http://www.loc.gov/standards/mets/>
- [16] 「アマチュア写真家野々村藤助と明治 30 年代写
真史の再検討」(『文化資源學』5 号、文化資源学会、
2007 年)